

Ⅲ 研究業績

1 学会発表

・川谷 正男(医師)

年月日	2023年5月25日～27日
場 所	岡山県岡山市
名 称	第65回 日本小児神経学会学術集会
タイトル	コロナ禍における神経発達症の医療と教育の連携についての現状と課題
要 旨	<p>【背景】 近年、神経発達症と診断される児童・生徒が増えており、専門医療機関での受診待機や教育機関など関係機関との連携不足などが問題となっている。また、コロナ禍において直接の訪問や面談が制限されることも多くなっている。</p> <p>【対象と方法】 福井県内の小児科医と全小中学校を対象に神経発達症に関する医療や教育現場での現状と連携についてのWEBでのアンケート調査を行い、福井県における小児の神経発達症の診療や教育の現状と課題を明らかにした。</p> <p>【結果】 神経発達症に関して教育機関との連携の経験のある小児科医は42%であったのに対し、医療機関との連携の経験のある小学校は65%、中学校は74%であった。よく行う連携手段とその有用性については、医療機関、教育機関ともに文書での情報交換、電話での情報交換、学校関係者が医療機関を訪問し面談が多かった。オンライン会議の活用は限定的で、有用性も前述の連携手段より低かった。医療と教育の連携を行うための問題点として、医療機関では対応する人材の不足や時間の確保困難を挙げ、教育機関では小中学校ともに時間の確保困難と保護者や本人の了解困難を挙げていた。教育機関が医療機関に期待することは小中学校ともに保護者に対する本人への関わり方の助言であった。</p> <p>【結論】 コロナ禍においても対面での連携の有用性を挙げる例が多かった。医療と教育の連携対応ができるコーディネーターの育成、連携のための時間の確保と保護者や本人に対して医療と教育の連携の意義を啓発していくことが課題として挙げられた。</p>

・川谷 正男(医師)

年月日	2023年8月5日～6日
場 所	富山県氷見市
名 称	第13回 日本小児神経学会北陸地方会夏季セミナー(白山セミナー)
タイトル	医療と教育の連携について
要 旨	2022年に行った福井県内の小児科医、小・中学校に対するアンケート調査結果をもとに医療と教育の連携の実際や課題について概説した。医療と教育の顔の見える情報交換や相互交流、多職種での連携システムの構築、オンラインの活用などが今後の課題として挙げられた。また、当センターでの教育との連携に関する取り組みとして、特別支援学校リハビリ相談事業(リハシル)と出前講座(リハシル)の紹介も行った。

・川谷 正男(医師)

年月日	2023年11月25日～26日
場所	香川県高松市
名称	第130回 日本小児精神神経学会学術集会
タイトル	福井県における神経発達症の医療と学校の連携に関する実態調査「医療が学校に期待すること、学校が医療に期待すること」
要旨	2022年に行った福井県内の小児科医、小・中学校に対するアンケート調査結果から、医療側が学校側に期待すること、学校側が医療側に期待することを中心に報告した。医療側から学校に期待することは、多い順に、学習障害への適切な配慮と教育、進学・進路時の適切な引継ぎ、学校内でのソーシャルスキルトレーニングなどの社会性の指導、学校内でのコミュニケーション能力向上への指導、不登校への対応強化、学校内でのアンガーマネジメントなどの感情調整方法の指導、学校内での心理カウンセリングの強化が挙げられ、学校内での療育的な活動を積極的に導入してほしいとの要望が多かった。一方、学校から医療に期待することは、小・中学校ともに、医療機関への期待は多岐にわたったが、特に、保護者への対応や学校への助言・相談への医療側からの介入の期待が大きかった。

・村田 淳(医師)、峰松 康治(医師)、櫻吉 啓介(医師)、野村 一世(医師)、有澤 章子(医師)、三崎 智範(医師)

年月日	2023年6月23日
場所	千葉市文化センター
名称	第62回 日本小児股関節研究会
タイトル	広範囲展開法により観血的整復した幼児期股関節脱臼3例 それぞれの経過と OR 非熟練医師による考察
要旨	入院牽引治療に習熟した結果、当科の股関節脱臼手術整復の絶対適応は2-3歳以降の診断遅延例に限られる。当科では2017年～2022年の5年間に3例5股の広範囲展開法での観血的整復例を経験した。 【症例】 4歳男両股脱、5歳女左股脱、2歳3か月齢女両股脱。術式は男児はOR+DVO+SIO、女児2例はOR単独で両側例は二期的に手術した。 【考察】 年長DDHに海外では症例1のようにORと同時に骨盤大腿骨の骨切りの併用が流行であるが、広範囲展開法はOR単独で同等の好結果を狙える術式である。本法の利点としては①関節包後面の十分な剥離とその結果、関節包の十分な切除(切開ではない)が安全に行えること②大転子を頭側に牽引する中小臀筋や梨状筋の確実な解離(外側の確実な減圧)の2点が大きいのと感じている。特に後者に関して股関節が中間位(屈曲位ではない)で安定しない場合は筋解離のみでは減圧が不十分と考え、躊躇なく大腿骨短縮骨切りを加えるべきと考える。

・村田 淳(医師)、有澤 章子(医師)

年月日	2023年6月23日
場所	千葉県文化センター
名称	第62回 日本小児股関節研究会
タイトル	「新生児期(出生時退院前)学会推奨項目スクリーニング+1カ月齢での超音波二次検診(福井方式)」のすすめ
要旨	<p>【背景】 福井県の乳児股関節脱臼検診につき報告する。一次検診は乳児個別健診に含まれ、小児科医・産科医が、1、4、9-10カ月齢で行う。検診項目は開排除限の有無のみだったが、令和元年に学会推奨項目の利用を県内医療機関に周知し、当面の目標を①二次精検率 10%確保と②二次検診時期を生後1カ月齢へと早期化、の2点とした。</p> <p>【対象と方法】 2014年～2022年の当科紹介児数を調査した。</p> <p>【結果】 福井県の乳児健診受診率は高いが股脱要精検率は最近まで1%台だったが2018年より増加し2022年に300人、6.0%を達成した。</p> <p>【考察と結論】 当科では産科施設での新生児退院前健診から当センターへ集約する流れで要精検率の増加を認めている。学会推奨項目適用率100%の施設もあり産科施設で新生児健診を担う小児科医への働きかけが特に有効と考える。今後も産科退院前新生児健診での学会推奨項目利用を広め、県下全乳児への学会推奨項目適用を目指したい。</p>

・村田 淳(医師)、有澤 章子(医師)

年月日	2023年11月24日
場所	神戸国際会議場(神戸市)
名称	第34回 日本小児整形外科学会
タイトル	「新生児期(出生時退院前)学会推奨項目スクリーニング+1カ月齢での超音波二次検診(FFDD:Fast Fit & Delayed Diagnosis法)」個別健診地域に最適な理由と実施のコツ
要旨	<p>【背景】 福井県の乳児股関節脱臼検診は地域での乳児個別健診に含まれ小児科医・産科医が、1、4、9-10カ月齢で行う。受診率は高いが、対象医療機関数が多いため精度管理や実態把握が事実上困難な点が問題だった。</p> <p>【現状】 2018年に学会推奨項目利用を通達し、産科施設で新生児退院前健診から直接当センターへ集約する流れが増加している。これにより要精検率は1%以下から6%に増加し、以前から目標としてきた早期診断・早期治療・早期教育も実現した。同時に公的乳児健診内で行われる公的な股脱検診も継続しfail safeとして機能している。</p> <p>【考察と結論】 学会は地域の実情に合った検診の再構築を謳っている。当地でも大人の事情に配慮しつつ工夫を行い現在のシステムを形成しつつある。本法は初めから意図して計画されたものではなく漸時形成されたものである。これまでの行ってきた取り組みの効果と問題点、FFDD法を行う際のコツ等につき紹介した。</p>

・村田 淳(医師)、峰松 康治(医師)、有澤 章子(医師)

年月日	2023年11月24日
場所	神戸国際会議場(神戸市)
名称	第34回日本小児整形外科学会
タイトル	生体吸収性インターフェアレンススクリューをブロッキングスクリューとして使用したソルター変法の2例
要旨	<p>【目的】 ソルター手術はDDH遺残性臼蓋形成不全の治療として広く行われ、術後の矯正損失に種々の対策が試みられている。当科では生体吸収性スクリューによる骨片の戻り防止固定を考案した。初期の2例を報告する。</p> <p>【症例】 5歳女児2例、遺残性臼蓋形成不全に対しソルター手術を行なった(脱臼診断は11か月齢と10か月齢でOHT法で整復)。1例目は初回手術直後に尿管結石による急性腎不全を発症し治療のためギプスを除去している間に矯正損失を生じ再手術となった。その際、鋼線固定の補強目的でインターフェアレンススクリューをブロッキングスクリューとして遠位骨片に刺入した。戻り防止効果は絶大で2例目は初回手術から本法を実施した。</p> <p>【考察】 生体吸収性インターフェアレンススクリューによるブロッキングは有効であり、特に角状骨切りにより骨片間の開大が少ない例には効果が高い。確実な制動ができれば鋼線固定を廃して抜釘手術も不要となる可能性がある。</p>

・池本 操(看護師)・日種 美由紀(看護師)・岡 広美(看護師)

年月日	2023年11月10日
場所	大阪発達総合療育センター
名称	2023年度(第18回)東海・北陸・近畿ブロック肢体不自由児療育研修会
タイトル	身体拘束・行動制限解除に向けた取り組み ～勉強会の気づきから、拘束解除を実現した事例～
要旨	<p>身体拘束等の適正化の更なる推進が求められる現在、当施設においても身体拘束解除を目指し活動に取り組んでいる。今回、身体拘束の勉強会を機に、職員が「腰エプロンは拘束である」と認識し、利用者Aさんの腰エプロンの拘束解除をめざした。</p> <p>拘束解除に向けて、Aさんの①情報収集②脱衣の原因を探る③余暇活動の充実④環境の整備⑤日課表の作成を行った。適切な排泄ケアの提供、Aさんの特性や生活に寄り添った日中活動を多方面から模索し、具体的な個別支援に取り組んだ結果、Aさんの脱衣が減り、職員やほかの利用者と触れ合うことで笑顔が増え生活の質も向上された。また、成功事例によって職員の自己効力感を高めることができたと考える。</p> <p>今後も職員全体で意欲的に取り組めるよう、組織的な拘束廃止活動を展開し、利用者の尊厳を重視したサービスを提供していきたい。</p>

・里 千鶴(言語聴覚士)

年月日	2023年6月23日
場所	愛媛県県民文化会館
名称	第24回 日本言語聴覚学会
タイトル	先天性核上性球麻痺に対する2年間のリハビリ経過
要旨	<p>【はじめに】 先天性核上性球麻痺は、上位運動ニューロンの障害により先天的に咽頭喉頭部の運動異常を呈する極めて稀な疾患である。今回、この疾患に対する嚥下訓練を中心としたリハビリ経過を報告する。</p> <p>【症例】 3歳、男児、A病院にて37週2700g帝王切開で出生。出生時より左手に驚手変形、両眼振を認めた。頭部MRI異常所見なく。VFにて持続性のミルク誤嚥を認め、先天性核上性球麻痺と診断された。以後、経鼻経管栄養管理となったが、胃食道逆流が頻発。1歳1ヶ月時、外来リハ開始。</p> <p>【初期評価】 1歳1ヶ月時、DENVER IIで粗大運動8ヶ月、言語、個人-社会、微細運動は12ヶ月。食事はトロミつきミルクを経鼻経管にて注入。常に湿声あり、時に嚥下反射惹起あるが、咽頭残留除去困難。高口蓋、開鼻声あり。</p> <p>【経過】 1歳6ヶ月時、座位安定。胃食道逆流の軽減あり、トロミつきミルクから直接訓練開始。1歳9ヶ月時、咽頭残留減少に伴い、ペースト粥に移行。その後、徐々に食事形態、食事回数増加。2歳7ヶ月時、歩行安定。日常的な指示理解可。2語文の表出あるも開鼻声強い。食事は、偏食は強いが軟飯、軟菜摂取可能となり、経鼻経管抜去。水分は少量ずつ摂取。</p> <p>【考察】 本児は、身体発達に伴い胃食道逆流が軽減した。また、認知面の発達に大きな遅れがなく、姿勢コントロールや嚥下の意識化などが可能であったことが良好な経過につながったと考える。安定した通院が困難であっても、その都度発達全般を見極め、家族が確実にできるアプローチを指導することが重要である。</p>

・里 千鶴(言語聴覚士)

年月日	2023年6月24日
場所	愛媛県県民文化会館
名称	第24回日本言語聴覚学会
タイトル	外科的治療により前頭葉症状に改善がみられた小児てんかん児の経験
要旨	<p>【はじめに】 外科治療により前頭葉症状に改善がみられた小児てんかん児を経験したので報告する。</p> <p>【症例】 5歳、右利き、女児。発症年齢11ヵ月。主に睡眠時にシリーズ形成を伴う左手優位の強直発作を認め、睡眠時脳波で全般性高振幅不規則棘徐波や右前頭部～中心部に多棘波を認めた。多剤抗てんかん薬治療抵抗性を示し、5歳6ヶ月時に右前頭葉切除術施行。</p> <p>【術前検査所見】 PVT-R:語彙年齢3歳6ヶ月(評価点6)質問応答関係検査:評価不能。FAB:3点。視線は合うが、質問への応答は乏しく、単語レベルのマイペース</p>

<p>な発話のみ。その他、注意力の低下、遂行機能障害、左手指のこわばりが観察された。</p> <p>【術後経過】</p> <p>術後貧血、少量の頭蓋内血腫を認めた。てんかん発作は日単位で見られるが術前と比べ頻度は減少し、発作の強さも少し軽減した。</p> <p>【術後検査所見】</p> <p>PVT-R:語彙年齢 5 歳 0 ヶ月(評価点 9)質問応答関係検査:総得点 127 点(3 歳後半レベル)。FAB:8 点(類似性と運動系列、Go/No・Go にて得点上昇あり)。術前と比べ、発話開始時の遅延反応に改善あり。語想起のスピードが速くなり、発話量もやや増加。遂行機能障害、左手指のこわばりが軽減。</p> <p>【考察】</p> <p>重要な脳機能に関与する部位を含んだ根治的切除は重篤な神経学的後遺症を引き起こす可能性も考えられるが、本児においては右前頭葉切除によりてんかん発作が軽減し、運動プログラミング、行動抑制のコントロールにて改善を認めた。また、コミュニケーション意欲の向上に加え、概念化や判断力といった思考力に良好な影響を及ぼすことが確認された。</p>

2 講演

・津田 明美(医師)

年月日	2023 年 4 月 22 日
場 所	越前市市民プラザたけふ 4F 多目的ホール
名 称	越前市児童発達支援センターなないろ支援体制強化の講師
タイトル	発達に支援が必要なこどもへの大切な関わり
要 旨	<p>越前市なないろが支援体制強化として放課後デイサービス、相談支援を委託して開始。</p> <p>発達に支援が必要なこどもへの大切な関わりは</p> <p>(1)こどもの発達の道筋</p> <p>(2)①こどものことを知る ②結果(診断)について知る</p> <p>(3)対応を知る ①どの児にも必要な対応 ②その児に必要な対応 ③支援体制を知る(作る)</p> <p>(4)自分(保護者)に余裕があること</p>

・津田 明美(医師)

年月日	2023 年 5 月 15 日
場 所	オンライン
名 称	福井県発達障がい児支援地域協議会
タイトル	福井県こども療育センターの地域支援(発達障害分野)
要 旨	<p>当センターの発達障害分野の取り組みについて説明した。</p> <p>外来講座、子育て講座、特別外来の紹介</p> <p>取り入れている手法</p> <p>インターネット情報</p>

・津田 明美(医師)

年月日	2023年7月19日
場所	オンライン
名称	発達障害児者福井県方式支援ツール「子育てファイルふくいっ子」活用のための保育士等研修会【基礎編】
タイトル	発達障害の理解と支援
要旨	発達障害についての基礎知識と対応について話した。

・津田 明美(医師)

年月日	2023年8月3日
場所	オンライン
名称	保育士キャリアアップ研修
タイトル	障害児保育
要旨	保育士のキャリアアップ研修として障害について基礎知識、特に発達障害について、療育について講義した。

・津田 明美(医師)

年月日	2023年10月26日
場所	きらら館
名称	第2回福井市特別支援教育コーディネーター等 地区別連絡協議会
タイトル	将来を見通した発達障がいのある子どもの支援について
要旨	<p>学校の先生の発達障害についてのよく聞く質問をもとに、発達障害についてどのように考えるか、対応の方法について話した。</p> <p>「強度行動障害」といわれる状態について、その原因、予防、対応について伝え、学校で視覚的支援を継続すること、環境整備の大切さについて話した。</p> <p>発達障害のある子の将来の姿がどのようなであればいいのいかを先生方と考えた。</p> <p>後半はグループワークを実施した。</p>

・津田 明美(医師)

年月日	2023年11月11日
場所	市民プラザたけふ 3F
名称	公益財団法人ふくい女性財団・カンガルークラブ福井
タイトル	這えば立て、立てば歩めの親心
要旨	低出生時の保護者対象に子育てのコツ、発達が気になる児の対応の方法について講義した。

・津田 明美(医師)

年月日	2023年12月6日
場所	坂井市春江西コミュニティセンター 大ホール
名称	第4回坂井地区発達障がい児支援研修会
タイトル	将来を見通した発達障がいのある子どもの支援について
要旨	スクラム福井主催 福井県小児科医会共催の支援者研修会で高機能自閉スペクトラム症の事例をもとに地域での支援の大切さについて講義した。その後グループワークを実施、地域の支援者の交流を図った。

・川谷 正男(医師)

年月日	2023年7月26日
場所	福井県福井市
名称	2023年度 医療的ケア特定行為従事者(教員)研修
タイトル	医療的ケア(呼吸障がい)について
要旨	福井県内の学校教職員を対象に、医療的ケアの意義、呼吸障害の原因、病態と対応について、口腔内/鼻腔・気切カニューレからの吸引の実際と注意点、感染予防対策、緊急時の対応、てんかんなどについての講演を行った。

・川谷 正男(医師)

年月日	2023年11月5日
場所	福井県吉田郡永平寺町
名称	福井大学子どもこころの発達研究センター講演会
タイトル	医療からみた発達障がいの支援のあり方
要旨	福井大学子どもこころの発達研究センター主催で福井県内の子どもこころに関する支援者や保護者が主に参加する講演会が開催され、福井県内における発達障がいの診療の現状と課題、専門医療機関、一般小児医療機関やかかりつけ医でできることとできないこと、医療と教育の連携に関するアンケート調査について、小児慢性疾患の医療について小児科から成人科への移行の現状と課題、今後の発達障がい分野における医療のあり方などについての講演を行った。

・堀田 さおり(保育士)

年月日	2023年7月9日
場所	福井大学医学部附属病院臨床教育研修センター 白翁会ホール
名称	第71回福井県小児保健協会学術集会
タイトル	児童発達支援センター つばさでの親子通所による支援
要旨	<p>難しい子育てに直面し不安な保護者が、親子通所(保護者参加型保育、個別面談、保護者学習会、ペアレント・プログラム等)を通して、障がいや発達の特性を理解し、わが子について知り、わが子に合った子育てスキルを身に付けることは子の育ちに好影響を与えると考える。また、親子通所で他の保護者と出会い悩みや情報を共有することは保護者の子育ての支えとなっており、将来にわたっての支援の仲間づくりにも役立っているようである。</p> <p>児童発達支援センターであるつばさは、引き続き、すべての子どもが適切な支援により当たり前の暮らしと育ちができるよう、親子通所の利点を活かした直接支援と福井県全域への地域支援を行っていく。</p>

・堀田 さおり(保育士)

年月日	2023年11月1日
場所	オンライン(福井県社会福祉センター)
名称	福井県保育士会研修会
タイトル	「ほめるコツを学んで心地よい関係を」
要旨	<p>ペアレント・プログラムは、①子どもや自分を行動で捉える、②できた行動をほめて対応することで保護者の認知の枠組みが変容することを目的とするプログラムである。</p> <p>「行動」で捉え、できた「行動」に対してほめることが重要で、それは子ども</p>

	<p>に対してだけでなく相手が誰であっても、また自分自身にも効果的である。</p> <p>そして、完璧でなくても 60～70%できていれば OK、それはいいところだと考え、どの行動が良かったのか、または、どう行動することを期待されているのかが分かるよう「行動」を具体的にほめることがポイントである。</p> <p>保育園等でもこの考え方を取り入れることで、子どものより良い育ちが期待でき、また、保護者や同僚との心地良い関係にもつながると考えられる。</p>
--	--

・堀田 さおり(保育士)

年月日	2023年11月8日
場所	福井県自治会館
名称	2023年度福井県医療的ケア児者養成研修・医療的ケア児等コーディネーター養成研修
タイトル	「あそびと家族支援」
要旨	<p>こどもには様々なあそびの経験が必要で、それは、定型発達児だけでなく、医療的なケアが必要な児であっても重症心身障がい状態にある児でも同じである。「きっと危ない」「なんとなく不安」という大人の抽象的な不安で子どもの経験を妨げてしまうのではなく、正確な情報を基に、具体的な対応、対策を、チームで検討し共有することが、安心して保育、発達支援をすることにつながる。</p> <p>また、支援者は、子ども本人の発達だけでなく、親の発達の可能性にもしっかり寄り添って立ち、親になりゆく支援としても相談を進めていく必要がある。</p> <p>親がやがて「親だからすべて親が何とかしなければならない」ではなく、「いろいろな人たちに支えられていい」、「ゆっくり立ち上がっていけばいい」と思えるように、児にかかわるすべての支援者が、縦と横の連携をしっかりとって、親が受容過程の中で行きつ戻りつしながら親となっていくことに寄り添っていくことが必要である。</p>

3 執筆

・川谷 正男(医師)

年月日	2023年5月22日
名称	福井新聞 教育みち案内
タイトル	朝起きられず遅刻します
要旨	<p>Q. 朝起きられず学校に遅刻します。</p> <p>息子は小学 5 年生で夜寝るのが遅くなり、朝はなかなか起きられずに朝の準備も時間がかかるため学校に間に合いません。早く寝るように言っても「わかった」と言うだけでゲームをしたりしてなかなか寝ません。学校の先生に聞くと授業中も興味がないとぼーっとしていたり、寝てしまうこともあるようです。どうしたらいいでしょうか。</p> <p>A. まずは睡眠リズムを整えましょう。</p> <p>日本は世界の中でも夜更かしをする子どもが多いと言われていました。2022 年度の学研教育総合研究所の調査によると、小学生全体の平均就寝時刻は 21 時 42 分ですが、学年が上がるにつれて遅くなり、22 時以降に就寝する児童の割合は 5 年生で 43.0%、6 年生で 63.0%となっています。睡眠不足の状態になると、寝起きが悪くなるだけでなく、記憶力、判断力、注意力、意欲や体力の低下を引き起こすと言われていました。では、よい睡眠をとるための生活習慣の 5 つのポイントを挙げます。</p>

	<p>1)毎朝決まった時間にカーテンを開けて日の光を浴びる。 2)朝ご飯を必ず食べる。 3)昼間はしっかり体を動かす。 4)夜は決まった時間に暗くして静かにして早く寝る。 5)平日と休日の睡眠リズムを同じにする。</p> <p>就寝前にスマホやゲーム機などを使用するとデジタル機器の液晶画面から発するブルーライトによって、睡眠リズムを調整するメラトニンの分泌が抑えられるためさらに眠りを妨げます。デジタル機器の使用方法については家族の間でよく話し合っ規則を決めるとよいでしょう。早寝が難しい場合は、早起きを心がけましょう。休日も平日と同じ時間に起きて日光を浴びる習慣を続けていくと、体内時計の影響から徐々に早寝にもつながっていきます。生活習慣の見直しをしても睡眠リズムの改善が得られず日常生活や学習への影響が大きい場合は、医療機関の受診も考えてみましょう。睡眠リズムに影響する心身の問題や必要に応じて子どもでも使用可能な薬物療法などを相談することができます。</p>
--	---

・村田 淳(医師)

年月日	2023年4月 発行
出版社	医学書院
雑誌名	臨床整形外科 第58巻 第4号 p411-416
タイトル	福井県式乳児股関節脱臼検診「新生児期(出生時退院前)学会推奨項目スクリーニング+1か月齢での超音波二次検診」のすすめ
要旨	<p>【背景】 福井県の乳児股関節脱臼検診は、これまで小児科産科に受託の個別乳児健診で行われる開排制限の有無での判定のみで行われ、要精検率は1%未満、問題症例も多かった。全国の他の地域同様に学会推奨項目を用いた検診を軸に再構築中である。</p> <p>【対象と方法】 2014～2020年の股脱検診における要精検率を種々の統計により後方視的に分析した。当初1か月乳児健診からの紹介増を図ったが、現在は産科医療機関での出生時スクリーニングと、間をおいて1か月齢での超音波二次検診を核としている。</p> <p>【結果と考察】 要精検率は1%未満から3.5%に増加したが産科医療機関により0～10%と施設差が大きい。福井県方式では詳細な分析が可能である点が大きな利点と考える。</p>

4 所内研修

・川谷 正男(医師)

年月日	2024年2月23日
場所	福井県福井市(当センター)
名称	2023年度第2回療育研修会
タイトル	連携を考える ～医療側の思い～
要旨	<p>福井県内の発達障がいへの支援に関わる人を対象にした講演会を行った。福井県での医療の現状と課題、医療でできることとできないこと、医療受診の目的やタイミング、発達障がいの長期予後と介入のポイント、医療と教育の連携の課題や要望、発達障がいの成人期移行の課題、医療が期待する福祉の役割、発達障がい分野における今後の医療のあり方などについての講演を行った。</p>